

サクーとサンカラプール郡：カトマンズ盆地の歴史とともに

長南 史男

1. サクーとカトマンズ盆地の歴史

サクー Sankhu^{注)} は、ネパールの首都カトマンズから東へ17km、サリナディ川の扇状地に位置する。サクーは、かつてチベットのラサへの街道筋の町として栄え、「千戸のムラ」、「クロ Kuro (水路) のあるムラ」と表現され、中世の集落のたたずまいを残すネワールのムラであった。

地名の由来はサンスクリット語のサクォ Sakwo (ヤギの生息する山の下：チベットの下在意) である。一方、集落の形が右巻き貝、サンスクリット語でサンカ Sa'm.kha に似ていることから Shankharapur サンカラプールともいわれ、現在の郡名に採用された経緯がある。

注) Sankhuの日本語表記はサンク、サクともいわれるが、ここではムラ人の発音に近いサクーとする。

ムラの歴史は3,000年という人がいるが、証拠はない。紀元3世紀または2世紀頃に建設された導師のためのヴィハーラ様式の岩窟がサクーの丘に現存し、インドとの宗教的なつながりを示す。サクーに残る石碑に刻まれたもっとも古い年号は538年で、土地の寄進に関するサンスクリット語の2行である。またサクーの集落は7世紀ごろに創基されたと推測されている (Sharma(1996), p.276))。



図 サクーの位置

ネパールはヒマラヤの高山とインド国境沿いの低地タライのジャングルによって閉ざされ、Land locked countryと称されることがある。カトマンズ盆地自体もまた、他地域への交通が難しい地理的環境にあり、歴代の王朝が主にカトマンズ盆地を支配域としていたことは記憶にとどめねばならない。

ネパールの歴史を知るには仏教の伝播・ヒンドゥー教との融合を手掛かりにするのがよいかもしれない。仏陀は紀元前600年頃、ネパールのルンビニで誕生した。ルンビニや渓谷内のいくつかの祠に、紀元前300年頃に仏教を広めたアショーカ王（インド皇帝、紀元前3世紀）の銘が刻まれた石碑が残されている。古代インドの影響を受けながら発展し、4世紀になって北インドから侵略したリッチャヴィ王朝がカトマンズ盆地を統治し、ヒンドゥー教の影響が強くなる。この王朝はサンスクリット語を使用し、多くの碑文を残した。その碑文のほとんどが土地贈与に関するもので、ヒンドゥー教の寺院施設が仏教の僧院の伝統と調和のとれた関係で共存したことを示しているという。640年頃、仏教の原典を求めて西域を旅した高僧、玄奘もまた共存の状況を記しており、この時代にはチベット、インドと活発に交流し、カトマンズ盆地にスワンヤブナート、ボダナート、パタンの仏舎利塔などの仏教寺院が建設された。長年にわたるサンスクリット化とヒンドゥー教の伝承文化の導入によって、ヒンドゥー教と仏教とが融和したと考えられている。

サクーの小高い丘の中腹にバジュラヨギニ Bajrayogini 寺がある。この寺には、ムラの守護神ともいうべきヴァジュラヨギニが祭られているが、カトマンズのヴィディエシュヴァルVidyeshvari、パルピン Pharping のヴァジュラヨギニーとともに、7, 8世紀、インド、チベット密教のネパールにおける拠点となった（English（2002）参照）。この他、カトマンズ盆地には、チャパガオンの森 Chapagaon Grove やパルピン Pharpingの丘の上の寺院など、ヴァジュラヴァーラとヴァジュラヨギニの寺院がいくつかある。

8世紀にはマッラ王朝がカトマンズ盆地を統一支配した。マッラ王朝はネワールの王朝といわれるが、9世紀になってサクーに残る碑文の言語はサンスクリットからネワール語に変化した。15世紀半ばにマッラ王朝は分裂、カトマンズ、パタン、バクタブルの三都が作られた。それぞれが美しい彫刻を施した寺院や王宮の建築を競い合い、現在、世界遺産に登録され、ネパールの歴史・文化を代表するものとなっている。

近年、サクーでは昔話が語られることが多くなった。

遥か昔、カトマンズは14km四方の大きな湖で、湖の中央には千本もの花卉のある蓮華の花が咲いていた。自生仏陀世尊は燃え盛る炎の中で、文殊菩薩がこの湖の水を吸い出せば、この地は人々にとって幸せな宝の地となることが出来るだろうと予言した・・・そして、サクーの山から宝剣が飛び、水がなくなった。

サクーは水の街である。マノハラ川の支流のサリナディ川は、カトマンズ盆地唯一の河川水系であるバグマチ河に合流し、ガンジスの大河に繋がる。このサリナディ川沿いにある扇状地にSankhuの集落がある。

立派な水路のあるムラと称された集落は、中世に、タントリズムにもとづいて設計されたという。サリナディ川の堰堤から取水され、水路は二筋に分かれ、集落と農地へ水を供給する。周囲の山からの湧き水が合わさり、軒先を水が流れ、トールごとに生活に必要な水場、ガイチがある。大きな貯水池がいくつか配置され、寺、広場、レンガと木枠の伝統的な家屋が整然と配置さ

れている。誰もが休めるパティがあり、子供たちが遊ぶ、開放的な空間がある。建築学による研究調査によれば、集落にある数多くの寺や洞は、バジュラヨギニBajrayogini 寺との複合体である。

集落の出入り口にはいくつかの門がある。とりわけ大きいのは神様が通る門、出生を祝う門、結婚の門、そして葬送の門である。4月になると、バジュラヨギニの神輿が山を下り、門をくぐり、町は人々の熱気にあふれる。

ネワールの人々は祭りを大切にする。毎月のように祭りがあるというが、9月Devi Nachではお神楽、Kya Danceが夜通し奉納される。踊り手は村の若者である。新月にろうそくの灯をたよりに、集落内の仏陀の像をめぐる祭り、ヤンヤ・プニ (Yanya Punhi) はヒンドゥーのインドラ神の祭である。トールごとにヨーシンと言われる祭柱を立て、アカシュ・バイラブ神の大きな仮面が人々に神酒をふるまう。10月には国民の祝日のダサイン、そしてティハールの祭りがある。多くの祭礼が誕生、お食い初め、幼少期、思春期、結婚、老化、死までの人生の節目に関連しており、非常に複雑である。たとえば、長寿のお祝いとして、77歳7ヶ月7日にはムラをあげて盛大に祝う。

サリナディ寺はヒンドゥー教の古刹である。マハーデーヴMaha Dev を祀り、12月の大祭にはネパール全土から、サリナディ河畔にある境内に集い、女性を中心に、1ヶ月以上、沐浴と祈りの修行の日々を過ごす。ネパールの週休日である土曜日には、自動車の通行が制限され、参拝の人々が車道とあぜ道を埋め尽くす。

ヴァジュラヨギニ (Vajrayogini, Bajrayogini)

ヴァジュラヨギニはタントラにおける最高位の神であり、サーダナsadhana (瞑想と儀式の書) の実践に係わる重要な神である。敬意を込めて「祝福された者」(bhagavati)、神(devat)または女神(devi)と呼ばれます。悟りを体現する意味での神聖な存在であり、他の悟った存在の群れ(ma'ala)の中心で崇拝されるため、仏陀の地位を有しています。ヴァジュラヨギニの崇拝は、西暦10世紀から12世紀にかけて、仏教タントラの成熟期にインドで花開きました。

マハーデーヴ (Maha Dev)

マハーデーヴ (Maha Dev) は、ヒンドゥー教におけるシヴァ神の別名です。「マハー」は「偉大な」、「デーヴァ」は「神」を意味しており、「偉大な神」「最高の神」といった意味合いで使われます。シヴァ神は破壊と再生、死と再生、時間の流れを司る神とされ、創造の神ブラフマー、維持の神ヴィシュヌとともに、ヒ

仏教とヒンドゥー教は混然一体となって、村人の日々の生活に溶け込み、小さなムラを多様性に満ちた魅力ある存在にしている。ムラーの歴史は近代的なネパール国家が樹立される前のカトマンズ盆地の歴史とともにあり、人々の生活は二つの宗教・文化の融合そのものである。以下は、2000年ごろのサクー滞在時の印象記である。

8月のモンスーン明けには、一面の緑あふれる水田のなかに、ぽつかりとレンガ色の市街が、一つの城のように浮かび上がる。村人の言では、市街部は900年程前にタントリズム（密教）の設計思想によって建設されたというものであるが、ネワール語でサクミダーバシ、「サクーの人の自慢は水路」といわれたように、サクーの人々はこの水路を大切にしてきた。方位軸に沿って整然と区画割のなかを2筋の水路が流れる。サリナディ川から堰堤によって取水し、自然の地勢にあわせて用水路が構築され、主として田植えのための農業用水と、生活用水に使われている。上流部の幹線はレンガで造られているが、その他は土水路で、雲母を多く含む土壌特性もあって用水路は壊れやすい。市街では自然石がふんだんに使われ、民家の軒下を水路が通り、せせらぎのようにサラサラと、水が流れる街であった。年月を経て丸みをおびた大きな黒い石が美しい。

市街部の家屋構造は硬い木材によって組まれ、レンガで壁を埋める、木とレンガを併用した独特の建築様式である。モンスーンの雨をせり出した屋根が避け、その軒を支える斜柱や窓枠にネワール文化を象徴する高度な木彫装飾をほどこされた家屋が立ち並ぶ。1階は店舗、作業場、倉庫であり、2階以上に家族団欒の居間、寝室、最上階がキッチンである。宗教行事などもこの最上階で行われることが多く、テラスもある。隣り合う戸は比較的大きな規模で集合住宅化されている。

伝統的な建築様式の建物が朽ち、街道筋としての賑わいはなくなっているが、小路に入ると、光と影の交錯する、独特な町並みが美しく残っている。それは、ヨーロッパの中世の町とも違う暖かさがあり、生活の歴史を感じさせる、残したい町並みである。日本でもそうであったように、水場も道も生活の場であり、人々が脱穀し、洗濯し、料理の下準備をし、日向に憩う、落ち着きのある公共の場である。こんな場所は、日本にはもうなくなってしまった・・・そういえば、隣のおばさんはおっかなくて、そのおやじは頑固で、子供の頃からごく自然に、隣近所を知っている、そんな時代。人々の生活をみているだけで、古い昔に戻る心地良さがある。

ムラには私たちが忘れてしまった、生活の時間がある。満天の星とはよくいったものである。星屑をほうきではえそうな、そんな夜に早々と寝る。その星がまだはっきり見える、未明のころから女性は身支度を始め、祠やここかしこの路傍にいる神々に、お供えし、献火し、祈る。それは、かしこまったお祈りではなく、フレンドリーという表現がふさわしい光景である。カラカラとお祈りのカネが響く。土鳩の声、小鳥の声、河のせせらぎ、すべての息づかいを感じる。

濃い朝もやのなか、バジリヨギーニ寺への参道を登る。この寺で発掘された8世紀頃の仏像によって、仏教の影響にあったことを確かめることができるが、その寺にはムラの守護神が祀られ、早朝には、坊さんが祝福を与えるティカをつけてくれる。かなでられる音楽は荘厳というよりは、軽やかな即興詩のようだ。祈りから離れた私にとって、明るく、おおらかに響く。そして、宗教を問えば、村人は仏教とヒンズー教を区別しないと答える。

（『農林統計調査』『農村の景観』長南,2000?から抜粋）

16世紀のネパール地域は、カトマンズ盆地のマッラ朝の分裂をはじめ、カトマンズの東西域に50近くの独立した小国家が分立する状況にあった。1742年、カトマンズの西、ネパールの中央部にあったゴルカ（英語グルカ）王国でプリトゥビ・ナラヤン・シャハが即位した。彼は、1768年にカトマンズ盆地を征服し、ネパール全域を統一支配するネパール王国を創始した。

次第にインドにおいて覇権を強める英国の影響が強くなり、1814年、ネパールはイギリス東インド会社との戦争で国土の1/3を失った。1846年、一宰相であったジャンガ・バハドゥル・ラナ

が実効支配し、国の近代化を進めた。ラナ家による専制支配は百年近く続いたが、グルカ兵士の存在が世界的に注目されるようになったのは、この頃である。1923年、イギリスはネパールと友好条約を締結し、「独立」を認めた。

1951年、トリブバン国王が亡命先のインドから帰国して王政復古を果たした。立憲君主制を宣言し、新しく創設されたネパール国民会議派のメンバーで政府が構成された。1959年、最初の憲法が公布され、初の総選挙が実施されたが、翌年にマヘンドラ国王がクーデターを起こし、議会を解散して政治活動を禁止し、間接民主主義の「パンチャーヤト制panchayat」を開始した。

パンチャーヤトは、南アジア全域で一般的な村レベルの長老議会である。本来は、村落共同体において、村民は個人同士や、村同士の争いがあった場合、5人（パンチ）の年長者の会議（ヤト）の決定に従うという意味である。ネパールの制度では、地方議会の代表者がより大きなパンチャーヤトに送られ、全国レベルに至るという形態であったが、マヘンドラのパンチャーヤトは民主的活動の封じ込めの手段にすぎなかった。

ネパール、サクー近郊の Gum・Bahal にある「導師の小屋」：

紀元3世紀または2世紀頃、古代インドにおけるヴィハーラ岩窟小屋形式の「掘削された」修道院住居の初期例である。「Gum・Bahal」という名称は、東インド語のグンファ・ヴィハーラ（文字通り「洞窟のヴィハーラ」）をネワール語化したものである。音節を省略する呼格変化は、ネワール語などのチベット・ビルマ語族の特徴である。したがって、末尾子音の音声的価値がほぼ皆無なため、グンファは Gum となり、ヴィハーラ（時にビハーラと発音される）は Bahal となる。典型的な初期ヴィハーラ様式に従い、これらの遺跡の洞窟は岩盤を直接穿削した箱状の小構造物である。Gum・Bahal のヴィハーラは、掘削された岩窟住居の最も初期の形態を最もよく体現している。構造は二室式で、入口エリアの後方に小さな寝室が配置されている。岩盤全体の母岩は、壁と天井を除いて除去されている。このような掘削には多大な労力が必要であったことから、高位の僧、修行者が利用した可能性が高い。

引用文献： Editor WILLIAM M. JOHNSTON, Photo Editor CLAIRE RENKIN, Monasticism, Volume I, A-L, Fitzroy Dearborn Publishers, Chicago and London, pp.56-57, 2000

2. 1990年代の村落開発委員会V.D.C.の時代

さて、1990年に民主化運動が起こり、ビレンドラ国王は民主的な憲法を制定し、複数政党制が認められた。地方行政システムの末端組織として村落開発委員会VDC, Village Development Committee が設置されたが、独自の予算を持たず、行政境界もパンチャーヤトのそれと何ら変わることはなかった（1995年から2004年の間に、カトマンズ、ジャナカプールの農村調査で、いくつかのVDCを訪問する機会を得たが、VDCの基本計画を作成しているのはまれで、VDC事務所に書類らしきものはほぼ見当たらなかった。）

サクー“ムラ”は、狭義には、3つの旧VDCを包含する。ネパール政府が1994年に作成した1:25,000の地図Bhaktapur (278506B, Department of Survey, Nepal)では、3つのVDC名、Bajrayogini、Puklach、SuntolにすべてSankhuが冠されている。

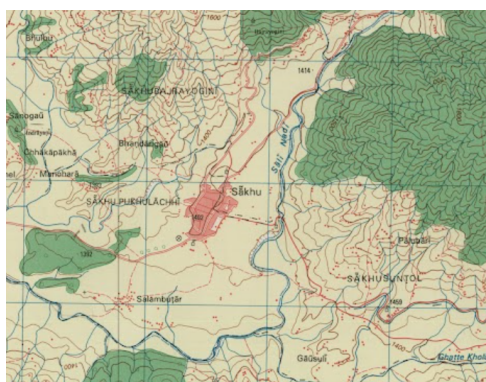
ネワールの集落は蜜居である。サクーの集落は古くから8つのトールTol (Tvah) で構成され、それぞれ祭事に重要な役割を果たしている (Shrestha2012)。このトールをもとにquarter、あるいは ward に区分されている。したがって、VDCの行政境界は下図のように集落の中心部でBajrayogini, Puklachi, Suntolに分かれていた。各VDCはカトマンズ Districtの下部組織となる。

サクーの住民は出生届、土地登記をカトマンズ区にある事務所に行かなければならなかった。2000年ころから、少しずつ集落内の道路がレンガ敷きへ改良されたが、住民はそれがどのように決定され、どこから資金が出たか、語らなかった。VDCに一律に50万ルピーの予算が配分された年があったが、VDCの事務所には看板がかかげられているだけで、常駐の職員も、行政事務書類は見当たらなかった。3つのVDCが一つの村として、まとまりある意思決定の場として機能することはなく、VDCの役割はきわめて限られたものであった。VDCは選挙区の単位としてのみ機能したといえば、言い過ぎであろうか。

1996年、ネパール共産党 (マオイスト) がネパール西部で武力闘争を開始し、1万8千人もの戦死者を出す内戦が続いた。2005年にはマオイストの影響力が首都カトマンズ市内におよび、サクーでも国軍の小隊が配置され、パトロールがされるようになった。

2006年、王政の廃止、連邦民主制度への移行などが既存の全政党との間で合意され、内戦が終結。2008年に王政は廃止され、国名はネパール連邦民主共和国となった。2015年9月、新しい憲法が公布され、2017年に新憲法下での初の総選挙が実施され、民主政権が誕生した。

長期間にわたる王政と形骸化した政党の政権交代劇が繰り返された結果、経済は停滞の一言につきる状態が続いた。かくして、南アジアのなかで一人当たりGDPがもっとも低い国となった。



Sankhuの地図の表記, Bhaktapur (278506B) , Department of Survey,Nepal,(1994)

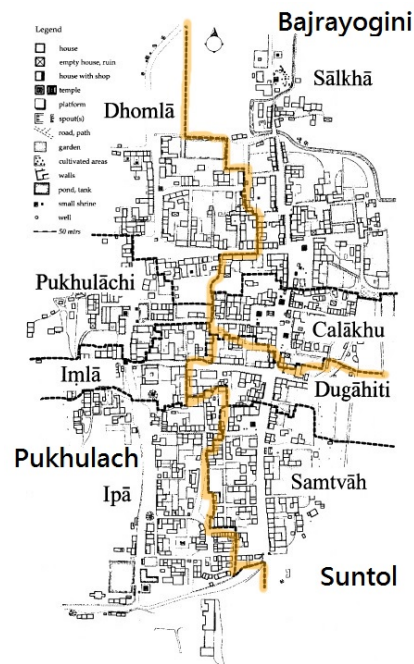


Fig. Sankhu集落内の区割りDivision of Quartersと旧VDCの境界線(tvah)

原資料：Schrestha(2012), Map4, p.67

この間、内発的というよりは、さまざまな国際機関が多角的に地方自治体制度の強化を支援した。ネパール初の人口調査Censusが1991年に実施されたのは、その端緒である。1999年に制定された地方自治法（Local Self Governance Act）では、地方自治体による地域レベルの活動計画／実施に関する権限強化といった地方分権化の原則を明確にして、地方行政システムに関する包括的な法的枠組みを与えた。すなわち、政府は地方自治法にもとづいて、VDCを統合し市制の推進を図った。隣接するバクタプールは地方自治の成功例と言われているが、サクーに大きな変化はなかった。

サクーの人々は他者に対して寛容であった。サクーライオンズ倶楽部支部やロータリー倶楽部支部、その他内外のNPOは、短期的であるにせよ、サクーのさまざまな領域でサクーとその周辺地域を包括する重要な役割を果たしていた。彼らは社会奉仕活動を通してカトマンズ区との情報交換、さまざまな国際NGO、NPO活動の協力・媒介者であったように思われる。これからは、地方自治体として、自らの主体的な行動が不可欠となる。

2015年の地震によって、Sankhuの集落の町並みは一変した。今、復興の途にあるが、最初に再建されたのは寺・洞であり、ガイチであり、ため池などの公共的な施設であった。一方、農業用水路はコンクリートによる補強壁が目立つようになり、宅地化の進行とともに、その存在が危うい状態にある。モンスーン気候にある農業の多面的効用を維持することで、ムラはより美しい町となる。維持管理を農民だけに任せるのではなく、ムラの公共財としてマチの発展に生かすことを忘れてはならない。

注） 所管はMinistry of Federal Affairs and Local Development 地方開発省である。2008年から2012年（4年間）にわたり国連開発計画の支援を受け、「地方ガバナンス及びコミュニティ開発プロ

グラム」 (Local Governance and Community Development Program: LGCDP) が実施された。LGCDP は住民のニーズを反映した説明責任のある地方行政の創出とコミュニティに基盤を置いた住民参加型開発による貧困削減をその目的として掲げていた。

3. サンカラプール市の誕生

2017年12月、Bajrayogini, Puklachi, Suntol, Indrayani, Lapsiphedi, Naglebhare の6つのVDCが統合され、人口25,338人、面積60.2平方キロメートルのサンカラプール市 Shankharapur Municipalityが生まれた。VDC制度のもとで、地方行政の意思決定機構が醸成されなかったから、準備不足は明らかである。市長・副市長が公選され、市の庁舎はサクーに置かれた。政府は中央省庁の職員を出向させるなど、市の行政組織を強化しようとしている。初代市長は、農業と観光を軸にした地域づくりを政策の目標にかかげ、市民で構成される各種委員会を設け、具体的な施策につなげようとしているが、市の財政基盤がぜい弱なために、その歩みはのろい。

上記のVDCに加えてカトマンズ寄りのTaliを含める案が浮上したが、2016年2月、サクー住民はゼネストによって反対の意向を表明した（私は、その時にサクーに滞在していた）。ゼネストによる意思表示は新聞、ラジオ網で放送された。

地方自治への移行期にあっても、儀礼・宗教・文化に着目すれば、サクーという歴史のあるムラの存在は変わらず、サクーを中心に多くの民族が相互依存の社会経済を維持していることに変わりはない。



<https://shankharapur.rgad.work/%e6%a6%82%e8%a6%81/>

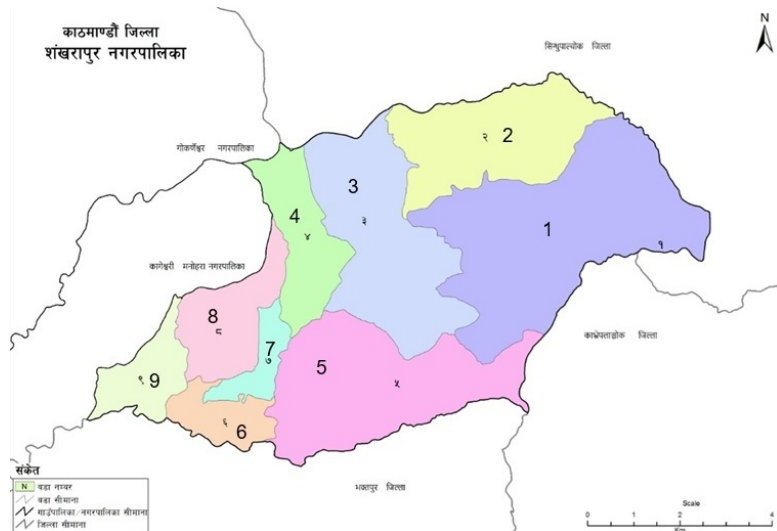


図 Shankharapur郡の9区の行政境界

人口の推移

表は人口の推移である。1991年のサクーの人口（3つのVDCの合計）は11,043人で、2011年のセンサス人口もほぼ同じである。近年、特に大地震を契機に増加している（行政区の境界が変更されているので）。カトマンズの都市化のみならず、近隣からの人口増加は顕著となりつつある。サクーはサンカラプール市の中核としての諸機能の充実が課題になっている。

2021年のセンサスによれば、現在のサンカラプール市の世帯数は7,140、人口は29,318人である。2001年と比較すると、1世帯あたりの人口の変化が大きく、6.0,4.6,4.1と推移し、大家族から核家族化の傾向がみられる。

旧V.D.C.名	2001		2011		2021	
	Household	Population	Household	Population	Household	Population
Bajrayogini(Sankhu)	632	3,798	928	4,333		
Pukhulachi	430	2,760	596	2,676		
Suntol	684	3,980	1,021	4,819		
Lapsiphedhi	919	5,040	1,209	5,629		
Indrayani	467	2,635	717	3,361		
Naglebhare	724	4,007	935	4,520		
Total	3,856	22,220	5,406	25,338	7,140	29,318
Baj+PuK+Sun	1,746	10,538	2,545	11,828	-	-

注) 旧VDC境界と新しい9区の行政境界の変更については未確認

注) 小稿は、ネパールの小さな農村がおかれた現在の状況を理解すべく、ネパールの長い歴史をかいつまんだ、旅する人のためのメモである。学術研究調査「ネパールにおける国際協力による農業技術移転の効果」「南アジアの灌漑効率」を目的としてサクーに滞在した際の共同研究者 Anita Manandhar, Surja Shrestha, Narayan Dakhalさん他との何気ない会話を思い起こしながら、書いたものである。但し、サクーにかかわる点については英語文献で補足し、ネパール語、ネ

ワール語の文献は未探索、未読であることをお断りする。なお、ネパールの公用語はネパール語、英語である。つい最近まで、ネワール語による出版は禁止されていたことにも留意いただきたい。

今後、サクーの郷土史が研究されることを期待する。ネパールは多言語、多民族国家であり、そのこと自体が豊かさを生む可能性がある。

未了2025年10月4日

参考文献（英語）

Bal Gopal Shrestha, Visible and Invisible of the Devi Dances in Sankhu, Nepal, Contributions to Nepalese Studies, Vol.23, No.1, January 1996, 255-269

Bal Gopal Shrestha, The Sacred Town of Sankhu, The Anthropology of Newar Ritual, Religion and Society in Nepal, Cambridge Scholars Publishing, 2012

Bal Gopal Shrestha, Heritage Preservation and Rights in Nepal, The Newar Language, Culture and Rituals, Vajra Publications Inc.Pvt.Ltd, 2024

Dill Raj Sharma, A Note on the Historical and Cultural Significance of Vajrayogini of Sankhu, Contributions to Nepalese Studies, Vol.23, No.1, January 1996, 271-283

Elizabeth English, VAJRAYOGINĒ, Her Visualizations, Rituals, & Forms, A Study of the Cult of Vajrayogini in India, STUDIES IN INDIAN AND TIBETAN BUDDHISM, Wisdom Publications, Boston, 2002

石井 溥、聖地カトマンドゥ：諸宗教・観念の複合と変化、ヒマラヤ学誌 No.18, 147-157, 2017